



非林良地集

表

雙雀菴水壺翁撰

俳林良枝集

江戸書林

萬笈閣

笑ふを造言をむとてたゞ紙おろす十丈の筆を千人の
松となほなほ松栢ををばくそれを芥子く志強く
はひぞうれ海よりトすなほとて難きに似く又易に
難くもさうあるもさう曲直紙用松すはす道にそ
なうふたふすうらざる業あらんそ友双雀庵を
正風乃道場を建むと俳林のこの家茂さふ日暮入
良枝を撰むともとて門生を両家けられいふ記
あふ居さをむのたふさうそちね長きそ終極き
をも切のふそ自然りゑる（或れ集中の圖書も

度から度狭うす規矩準繩よはつきさるるものをも
時世の棟梁といふもさうさうなつらむかくいふを能人
りゝゝゝゝゝゝゝ仕法帳をよみてあきらめたまふ
賤民たるまゝと改めつて手齊げゝゝゝ
皇太子とならす

安政七年甲午月

高橋庵主

樹石書

序

例言

一 能潜の向集を多くしてその題毎に注解をわける書
類を著し安政且より蒙書と云ふ述一題もよくある
多く蒙書類と云ふは細注を入る古人今人能向成
類も一瞬に及ばざるにむかふ秘書の席
上は惜しむを惜しむ一助にもなるべきを著す
の所を著す

一 漢文の注解を多くして漢を易き書と云ふ人けり
蒙くも蒙士のけりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 引書ハ増山の井を宗とせしよりハ東野の成山居士
 季忠家のふりをもせ紙端に窺ひしハ先ハ季忠に宛
 紙増山井を引し志ありしハものなりと云ふより
 ありハものしつゝありておハ紙書讀よりて是れ
 一 題名を依林良茂集と號しハ少志あり歎るハ
 歌林良茂集連歌ハ連集良茂とありて世々名
 ありハ行も世風流ハ志あり族ハ此歌集も大に
 ありと云ふありしよりハ依林良茂と

唱て宮川西中ノ著ト書ハ何れをたやと云ふ母
 埋せし中標題を唱て母士入歌きハ此とありぬあり
 ちと出るおせりハ云々ハ云々の編集をおこし
 も新集あり世ハ弘明ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々
 のハ人書籍の字ハハ博ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々
 こと事ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々
 ハハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々
 おあり集ありハ此その云々連集を唱て云々
 集并題名の傍ハ題名を記して見易きを宗とせし

夫夫木集

堀堀川百首

龜龜山七百首

藏藏玉和歌集

年年中行事

職人盡

歌林

榮雅集

詞詞林

朗朗詠集

袖袖中抄

異異名類

奧奧義抄

萍萍の跡

桂桂花抄

藻藻塩草

秘宗祇

無長明

增增山井

滑滑稽

傘傘御

毛毛吹草

年年浪草

隻隻鹽輪

をを

細奧の細道

習風月帖

諧隨齋

系系切齒

源源氏物語

伊伊勢物語

狹衣

枕枕草紙

徒徒然草

土土佐日記

十六夜日記

引目一

月月令廣義

前漢書

荆荆楚

嘉嘉古史前集

文文選

尚尚書

范靈公

圓圓機活法

蟲蟲海集

十十郎錄

天天賢遺事

大大裁禮

三三禮義宗

奠尚書大傳

鄴鄴中記

禮禮記

元元享親書

報報恩經

孟孟蘭

夢夢華錄

法法華新註

埃埃囊抄

本本草綱目

本本大和本草

紫紫塵明詠

蕪蕪頌圖經

農農政全書

花花景

羅羅山文集

五 五雜俎

常

清補

草紙

酒 酒方書

筑

新統

犬坑版

河 河海抄

發

計六

發明辨

湖

去來

湖東問答

屑

糸屑

系屑

通俗志

四

四季部類

梁

梁書

本

本草

圖譜

著

古今

著聞集

孫

續孫策

職

職原抄

躬

躬恒

秘藏抄

技

技折款

仙

仙覺抄

軒

新千載集

書

書言故吏

兄

句兄弟

孝

孝經

女

崔浩女義

題

題叢

百

世夏百談

零

零陵記

舊

舊夏記

數

和漢名數

山

山家集

鑑

本朝文鑑

爲

十論爲辨

武

武江年表

潛

潛確類書

晉

晉樂志

福

福州府志

二

二水記

東都同録

歲

元

元

元

元

元

元

元

元

元

元

元

神

神

神

神

神

神

神

神

神

神

神

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

鏡

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

真

真

真

真

真

真

真

真

真

真

真

門

門

門

門

門

門

門

門

門

門

門

達

達

達

達

達

達

達

達

達

達

達

引目二

秋之部 題同録

乾坤之部

七月

立秋

七夕

星舍

彗星

彗星の格

彗星の格

年、返り

涌

彗星

砂冠

彗星

秋の月

八月

之日

文月

砂冠

星舎

二の星

星の格

二の星の格

立彗

七、星、沈

涌

花中

霜

牙入

彗星

秋の山

九月

立秋

秋の節

星の節

星の節

文の川

秋の衣

乞叩針

花の案

七、夕、鞠

角力

霜妻

花の節

秋の山

十月

十一月

冬

秋の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

星の節

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

秋之部

福道
柳葉
柳葉
松の實
栴子
栴子の實
栗
栗
栗
栗
栗

生類之部

秋の量
養
憚
藤子草毛虫
蝶
鷹
比穴入
燕帰
色多
弱
少雀
多里
綿の坪登
川花
若

新

辛四 小口

辛八 引板

辛七 桑山子

六十七

燒帛

辛九 崔為帽

七十七 戲歌

七十八 紅葉餅

八十九

尾城野

綱代

七十七 雲治花

九十二

衣倉

衣倉

十四 根草

十五 刺鯢

十六

枝

枝

蓮の飯

二十二 夜折

廿六

日さ束

廿二 熟麦

四十 糠束

廿八 新麦

八十三

附の

廿二 熟麦

四十 糠束

廿八 新麦

八十三

量海

廿二 熟麦

四十 糠束

廿八 新麦

八十三

中

廿二 熟麦

四十 糠束

廿八 新麦

八十三

湯

廿二 熟麦

四十 糠束

廿八 新麦

八十三

神

神

十四 根草

十五 刺鯢

十六

結

門

五 小口

十二 逆鏡

十三

送の

六

冬の月

十二 施儀鬼

十三

玉

竹

五 小口

十二 逆鏡

十三

馬

麻

五 小口

十二 逆鏡

十三

切

切

五 小口

十二 逆鏡

十三

秋目三

經本

十八 遊火

大文字

火

六十七

門火

十九 八幡

四水村

四十四 場

六十八

地

種屋

四水村

四十四 場

六十八

心

向

四水村

四十四 場

六十八

放生會

津

四水村

四十四 場

六十八

寺

宇

四水村

四十四 場

六十八

彼

以

四水村

四十四 場

六十八

秋

國

四水村

四十四 場

六十八

番

下

四水村

四十四 場

六十八

四

下

四水村

四十四 場

六十八

任

任

四水村

四十四 場

六十八

白

一

四水村

四十四 場

六十八

栗

一

四水村

四十四 場

六十八

谷

一

四水村

四十四 場

六十八

美

七十六

四水村

四十四 場

六十八

八

七十六

四水村

四十四 場

六十八

延

七十六

四水村

四十四 場

六十八

延

七十六

四水村

四十四 場

六十八

九十三

卷之九

不憶同參

四

1

1

— 11 —

2

六



1

—

李

一

1

1

三

1

1

廿八

11

四

2

—

二

102

1

四十一

九、

12

九十七

10



1

1

六十一

—

八十

五

十二

十

10

卷十二

十

十

六十

花の春

花の春は高野六世の御代にあり

ムツ 高代め

人は高野地に住みて是の春

ユト 儼月

初空

初空へて一雲を獅子の天宮より

古 一 条

もつ雲を日の出する所の云々

祖 銀

日の始

逢ふ人へ跡をみてもや日の始

下サ 旭 高

初日影

おむすは水もあけりそ日影

古 万 古

初手水

望みぬら水もあけりそ手水

下サ 月 杓

船のりもあけりそ井や初手水

昔 唐

歳旦

雲のりも門さへ年のはりそ

下サ 俄 友

初鶏

初鶏や妙は雨の初りなり

東 足

もつ鶏は初はあけりそ

高代女

初鳥

もつ鳥は初はあけりそ

系 有 鳥

花のりもあけりそ

花 鶏

もつ鳥は初はあけりそ

五八 鳥 左

四方拜

〔公〕元朝からの時をへてき属星を唱へ天地四方 山後城

もつ鳥は初はあけりそ 天地四方の拜ありそ 雨のりもあけりそ

星を唱

高代女は命星を唱へて七返り唱

星 佛

在家の世俗星はあけりそ

日月水火金土の七曜をまゝ一ちる
よ紐つめの曆あり

去年氷室よりある氷の厚薄を奏し、
今年より石尾の氷を奏するあり

振毒の贅ハ糞ト云ふ魚を云々ト建籠常云々ト云フ一銭
 著ハ節會云々ト云フ一銭ト云フ或ハ此等ノものヲ諸國奏ト

序と何の事也

・は、極端な聖人行華の時、極人となりて一夜酒をなすり
歌をうて却て是後旦朝一けりてあはれきとのや

極く上品な花の苗の家

古
博
堂

一日慶事のくゝ慶方濟ひさゆゑに贈礼贈り
予とのや慶のお礼拾拾は有り

元親とらの一天は位園の府殿より招かれ、これに
ついで、又、あつしき火を焼くや大みくろ、雑煮の

為之用事あり一説大咳あり・按此は今
在家より十四日年越え門よりあつり・ふけをきけりといふ

卷之四

三月三日ふくろぬきつ里かへ

由誓

元方棚

婆利塞女の神を元方と悦びてゝみ
解難煮高くと傳へやつ事也。今元方

諸君、其方より神に
詣りて、其方より神に

松よ暇をほつゝとむふ之方哉

下丹
分貴

心何ぞあそ嬉しきえ方うぬ

等菜

むのハ元朝とらふ時
訓讀せしめ也

【箋】（一） 正統二年、福神、双をとりて、あまの元日、夷の像を画する。是、東師の所也。授く、蛇尾、蛇をとりて、あまの近き、近きなり。

今集

明々々々々々々々々々々々

古
東
室

貴子子人買不機強走人若夷

芳厚

夷
廻・大黒舞

民間の門々をうかひ舞つた後、今江や
吉原より囃ひ舞ふのは余風なり也

張子心大建舞子格子之規

冰壺

春
駒

妻の如く馬をうつらうて路はゆるぎぬし舞ふをの是れ毒豹
と名つて都鄙と必ふ阿る出升とを禁中より、四月七日白

馬を水邊のほとりへり西をを
下より牽きて来るる小や

毒駒や子持と小屋の文花

古
太
祖

鳥追

追
笠を忘帛を以て面をか蔽ひてきたりけき後法をもあへて
民間の門とゆふるあるを尋ねて入り元田もこのあるを追ひ
拂ふの辞より出ざるあり附て云今血子よく女乞食の縁生を思
三徳を修めきま夜をうたふも是より出づべきや

多路の編笠や笠よりふり

古
一
具

傀儡師

夷廻の字あり其名無
き所ありてし出也

佛眼師阿波の傍門を小唄の形

其角

毒らゝ手是のたまひや傀儡師

祿之

多田殿の梅もわづかにいらぬ

古
湖
津

猿引

形を弄りて其厥の極を盡さるゝなり是馬權神と
しふ神をまつるをいふなり

猿虎也一家也觀乎新

波
濤

祖廻

頃よりそふ張のふりんとて知らし

出羽
檜
泉

親と子にやうな格好が精なり

布山

家問の生と養へぬ者

上毛
琴堂

門神棚

在家の奥戸に棚をとりて神をまつ夜は
かきつけしを飾りたるあり

神の如く門下の見えの棚飾り

世負

門松

・むくね・おさね・おさね・大かきり・かきり炭
胡貝持寄る縁のまじり・をまきりふと何せと
をちきり作らば成候るものあり年始めの祝ひよ
用ゐる一糸禪園の祝御き侍へき也

世に於て年

月雪の為りも出る門の松

古去来

門松やそ留まのき玄冥お

古極悦

お松やえあるま所の子松島

古篠島

鰯り

炭たきり米俵まきかきりうれ

ヒナ子心語

鰯竹

門鰯

お松を雪のあやう門鰯

春湖

糸まきりおまつきまつり

斜稱

松鰯

國々の松のきりあり松やしき

古候節

鰯海老

鰯海老親けりし世のまつり

古乙良

掛鯛

此鯛の月形目と和羹しき食へば温疫痢病を治すの
邪薬を辟る

鯛鯛や歯をきかきり當奈のとき

古大輝

の年鯛や山のまきり取入のきせ

芳子

橙

代に赤たまき呼ぶ赤親
の葉とまき

橙の破部ぬき袂う那

名一清

代々を承けたりや嫁の夫

疎雨

若水

● 三三丹 ● 井美水
● 美水桶

汲つゝ井も若水とありはあり

卷二

懋 周

返あも諸君水のたのむところ

山子

井開

井ノ巻、やまの巻、上、一、板

冰臺

大婦

元日は大みくしと云ふる榮を大みくしと云ふる用とあり
骨とありといふや古抄ありといふにむへいぶえといふ

文字のそとせう
方のより也

若餅

三日の肉はつきたるをちを
雑煮とて用ゐるなり

幾の子

数を中や松の葉もそよ撫とる

拙誠

雜煮

其の餅は形々蓬菜の葉を以て

水壩

かんをいれふ・いわめのこ・むまひあぶ・ひき豆・た箸
ひきき・ふめをいれ・ふあけ

上下の口を合さず、
難煮の水

為山

俗類抄の巻の雑考

漁
庫

言事より又其言より出れり 難き代

九
起

芋のかき

〔年〕年取を云ふをかねといふより祝儀あり
いはゞ子の多きその故を祝ふ事

箸をもちてこれの糸や革のたて

桑雅

名月と堀のおされと芋のおみ

文海

信房はまなも移古あふりぬ 信房

ふむつゝまをいふも氣もあはれ 山

破さめや信房つゝま 我

俵子

生海を

俵子名いぢりひるもいぢり 味

押鮎

鮎は年魚より年の始に用ゐる魚なり 五 元日の

押鮎や名もいぢり 仙月

お鮎や名はいぢり 花

鏡草

正月一日大内よりをちひの

寶船

船より船より

須戸町名も信房は名も 嵐雪

銘も名も信房は名も 危得

年男

二日より名も信房は名も 梅通

庭竈

庭の竈は名も信房は名も 華葉子

庭の竈は名も信房は名も 嵐牛

福葉

福葉は名も信房は名も

福葉は名も信房は名も 梅

遣羽子

やうゆゑや日の影慕ふ朝夕なり

義交

破魔弓

破魔矢
たつひと律負をいむるありと此むりの

おのころのふゆ
ひより

弓
始

もあやうや舎といふもの 世 貞

學識的才力與否。白雲

魚のぬき飯のやうに食サカミ乙屋

常葉の葉のうしろ
近江 帆 端

馬乘初

東よりや神風ふり来り新のうへ
出月 峰 山

船乘初

夢功平 體 傳 層 水 花月

飛馬始

年獲云梁を引て飛馬始と、多り又糸子難一と

云飛馬の二字をきく時、右より左むく一曆の元日は何

之の六馬のまゝに走馬(真)は、史記始に「**ト**」より是又馬の予まの

[illegible]

六根六識陰陽呂律米を以て辨て貴しきこれ六食を歟之より金匱水

火薪の薪を木火土金水の五行の象をまひ集りて飯を食ふ

元生命を繋ぐハ決そのあり **枕** 之をひめ云あり **春** 漏埽

長々あり或説く米より粥よりきんの儀あり云云米より

は、する飯の始もす、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

んや(胃)文石曰予小佐治氏に坐るをきけりひめ初ハ馬の舌を

馬はつゝさへ、東名の足
けをも轡書、けふさき
て同名人をまつものとけり
是より

此の居る

うもふきふの閑ひや都ありえ

葉雅

持あゝの園やのさあを編織始

波路

うゝ綴へ足跡をふくむはけり

双岳

湯殿始

汲足るや湯殿より水のきむ水

三保女

寶引

寶引は鴨半の角をけくあり

古其角

福引

福引や日の暮るまで八ふん人

水壺

藏開

水主連の峰より伝ふり蔵開き

金山

著衣初

きぬきをむくはしむあり三月日の
肉舌目をえくくはせあり

玉

若をえくくはせをえくくはせ

尾村

細るのきき人見をのゝ若を始

水壺

三つ物連歌・同俳諧・裏白連歌・同俳諧

初夢

三つ物の朝の
ゆめあり

えくくはせや若をえくくはせ

古其角

初夢やさあをの後もをえくくはせ

古其物

初曆

あけみ
ひき

何れもなむ初曆よりえくくはせ

イヨ 葉園女

初夢やむ初曆の席や初夢より

玉 葉二

手毬

汗濡より手毬よりえくくはせ

古成美

何れもなむ初曆よりえくくはせ

金 波月

宵の年・若き年

去年
今年

今年

古年

春若し

筆試・試毫

みづこゝゝ 欲をそふ世し留る水

四端

神の體のほより城こそとみくゝ

響玉

引の糸の糸よりつるきゝゝの糸

古木葉

ゆゑたよきゝの影や 春 冬

雪笛

ふゝ糸の厚きよき糸の糸

龜水

菜大根やふゝ年よりのけむり物

氷壺

春若し 歸るゝゝりもとえぬ居

伊乙郎

書初

書初め 融はゆゝあゝやと硯

古道彦

吉書

かきめや水は柳の葉あゝ

花雲女

筆始

そゝみゆゝゝゝゝゝの古書や

甘茶

筆始

のゝゝゝゝゝゝゝゝや草やゝめ

不條

筆始

旅の記ゝゝの書出ゝゝ草始

出羽 接衆

筆始

之益の酒はちゝゝや草はゝゝ

文起

筆始

舞初 樂の

氷壺

筆始

春若し 歸るゝゝりもとえぬ居

伊乙郎

謠初

彈之乃也若夫子家子孫陳安

佳音

松風もあゝ秋のきこえは
幼

古

成美

わづのいふ方よりうなむめ

平

常晴

松蘿子

澤神のいさめをせよや松をよ

世
負

和歌中子孫愛の情もさうなる

波
瑤

千壽萬歲

〔年〕 大和國窪田箸尾高村と西坐所

萬歲

〔年〕今の世の義士ハ或説ハ大江定基博學大方ノヲ併過

赤松の百性はなりて併は東漸の事を嘆かざる。のちのめりて世
 りを忘るは婦をせり今の世は死生——三河万葉の世あり。出
 羽國ありては縁多きもの上下を異門とよぶ
 旅を明。あそび万代にふり——なり

稻積

神降や水の上より三つあり
稲積・稲積くも正月の霜起を

冬 遠 閑

稲積くも水の上より三つあり

秋 節 和

稲積くも水の上より三つあり

冬 五 後

稲積くも水の上より三つあり

冬 司 水

初商

買初・初店卸・帳綴

冬 水

初市

初市や初起り起る久世かき

冬 水

初市や初起り起る久世かき

冬 額 席

初賣

初賣や初起り起る久世かき

冬 松 餅

初荷

初荷つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初荷つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初振舞

初振舞つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初振舞つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初振舞つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初小袖

初小袖つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初芝居

初芝居つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

初芝居つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

松の内

松の内つ多き馬の初起り起る久世かき

冬 松 餅

供物を境内へ納めたりする事あり。其の類は草紙の類と和州同し。是の
箱は、
安き世のつとめを爲す菜盒子 附石

丹王菜 空隆寺より何そめしに、
盒子 水菜

畫鶏貼戸 草紙。元日のつとめあり。國は西の鶴を門にめり。へよおき
す。上よりある。そのまをさし。それさし。とさめ。百鬼おさる。

如願 軍唐土より或る人、信勝大にぬねとわい女を乞ふ。彼老
人、乞ふをのりせぬ。ぬねを乞ふ。元朝よりぬねお
さる。起出たり。とて、人逐ち。中世より、糞堆の中より、飛入る。其の後
とて、さる。さる。後人元日は、ぬねを乞ふ。人形を乞ふ。中世
糞の中より、あけて、令ぬねと
わい女をせり。

葭灰ヲ飛ス 立春日の日、何の葉の灰を律の端より、さる。お常、其の葉
を、さる。さる。灰おのつ。飛とて、
事

春盤・生菜 春の日の、
事

春燕をいふ、
事

初子の日 子の日、
事

子日遊 大松の、
事

小松曳 日の影を、
事

翠岷

磯菜摘

磯菜摘 磯菜摘

由岐雄

蘿蔔

蘿蔔 蘿蔔

蘿蔔

福涌

福涌 福涌

福涌 福涌

初寅泰・番卸

初寅泰・番卸

初寅泰・番卸

初寅泰・番卸

初寅泰・番卸

石

月居

初寅泰・番卸

川

芝席

番卸

番卸

秋田

換水

初卯

初卯 初卯

初卯 初卯

初卯 初卯

金

落彦

愛宕寺天狗宴

愛宕寺天狗宴

卯杖

卯杖 卯杖

卯杖 卯杖

枕

卯杖

修了後七日の由修法を此より
眞言院へ禁中より

太元師法

女叙位

ありませハ三子を用ひらるゝ可や三子ハ天次のありあるは縁
傳ゝゝあり毎年ハ文を出して五位のくゝゝをたゞやゝあり
若より紀朝臣重明と
同一名をたゞるゝ同云

女王祿を賜

常陸帶神事

是は中の中へ入る輩を又女めけ輩のやうな
 きて、則ち常のぬいの男と親しくあひあは

あゝまゝにいつか
橋を出て常陸^い常

思小中書子也常陸常

文字亦善，何足新正？少謹帶。

かほしき房也常陸常

夷祭

あきや十日夷のさくら

在部十日夷人來市

若くはうぬ十日夷のさそひ連

縣呂の除目

つて、ふと法外に任ぜしむるや
まゝのや公あり

公
二
何
り

上元日

綱曳

十五日の予ありてあまのついで
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

綱曳や後より足の子補ふ

古山

綱曳の雪。踏むむつとあり

上中 山

つふ曳や足の子はしに隣り町

山

御薪

十五日の予ありてあまのついで
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

御薪はあまのついでに足の子補ふ

樹石

つふ曳や足の子はしに隣り町

樹石

粥の木・粥杖

十五日の予ありてあまのついで
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

粥杖はあまのついでに足の子補ふ

粥杖

粥杖はあまのついでに足の子補ふ

古山

粥杖はあまのついでに足の子補ふ

古山

粥杖はあまのついでに足の子補ふ

古山

小豆粥祝ふ

十五日の予ありてあまのついで
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

粥杖はあまのついでに足の子補ふ

古山

平岡の御粥

十五日の予ありてあまのついで
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

獅子頭の神事

十五日の予ありてあまのついで
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

賭弓

十八日は天子の弓満殿をえりて
ありて打橋をえりてあり
大つねを曳けりて後負あり
古山

出た後の年よりちういふ名の録

人あつたそれとてきつたりや師忘傷

氷壺 雙岳

福壽之さ

元日さるる

俗へ来りて獲のさるや福壽州

茶屋

而石

暖つてく波水もさるるさるき

東

漁藤

氣さへさるるさるる福壽州

蒲

有麻

部さるるさるるさるる福壽州

大板

有麻

若さるるさるるさるるさるる

下

十

東風

庭石の若さるるさるるさるる

下

十

初春風や若さるるさるるさるる

庭石

初春風や若さるるさるるさるる

大板

有麻

氷流

初春風や若さるるさるるさるる

庭石

初春風や若さるるさるるさるる

大板

有麻

氷浮

初春風や若さるるさるるさるる

庭石

初春風や若さるるさるるさるる

大板

有麻

初春風や若さるるさるるさるる

大板

有麻

凍解

初春風や若さるるさるるさるる

庭石

氷さるるさるるさるる

凍る雪も雪もはけり雪も清み雪

古

氷きへけるもこれハ氷も雪も

古

雨塘

風のぬく氷もたてる氷も雪も

古

幻お

残氷

・氷のひき・魚氷よのわる 月立春の五日の條より

雪解

畑中や雪も解き雪もける

古

山方

雪もける雪も解き雪もける

古

藁屋

雪もける雪も解き雪もける

古

梅笠

雪間

あつりき物も雪も解き雪もける

古

五坂

花雪も雪も解き雪もける

古

梅笠

残雪

雪も解き雪も解き雪もける

古

七朗

雪も解き雪も解き雪もける

古

不降

雪解水

雪も解き雪も解き雪もける

古

氷壺

雪消

雪も解き雪も解き雪もける

古

樹石

雪の絶間

雪も解き雪も解き雪もける

古

佳音

雪霏

雪も解き雪も解き雪もける

古

氷壺

雪ふり

雪も解き雪も解き雪もける

古

杉宇

旅人も雪も解き雪も解き雪もける

古

蘇史

泡雪

氷城の雪のふりや雪ふりて
候雪や降るふりもはるすれ

古 永 紫

候雪や消つてふりふりて

古 松 山

候雪や細き江戸のふりて

古 山

候雪のふりてふりて底うみ

香 芸

春の雪

ふりてふりてふりてふりて

唐 杜 水

候のふりてふりてふりて

見 外

雪忌

・雨水の節 正月の中

鰯魚を 祭る

候のふりてふりてふりて

出 河 風

木の芽

候のふりてふりてふりて

素 山

下 崩

候のふりてふりてふりて

古 乙 二

鶯 菜

鶯の鳴声は貝刻
きき小葉あり

候のふりてふりてふりて

古 成 美

水入菜

水入の近郊畦に水入菜は
入菜は入菜は入菜は

候のふりてふりてふりて

水 菜

是れは市のやうなり水入菜

金 里 水

梅すせりその何とぞぬるべき

△草

花外

はむききつゆのちる雪や蘆花

波路

雪のつらふ花のちる雪や蘆花

樹石

めづきに結つ雪のちる雪や蘆花

拙誠

梅のちる雪のちる雪や蘆花

氷壺

雪のちる雪のちる雪や蘆花

水戸

雪のちる雪のちる雪や蘆花

△草

天由

梅

梅の意
雪の梅

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

雪の梅影ハ清ハれさーぬ

△草

塞馬

青柳・青西ふき・川菰・風見針・川石松・玉柳
川石松・志すう菰・門石菰・芥すう松・赤ふ菰

裁后
初守

あふ
河を

△ザレ
里
玉

嘉我

下
毛
談
之

五年
作
禁

墨子

青柳・青西ふき・川菰・風見針・川石松・玉柳
川石松・志すう菰・門石菰・芥すう松・赤ふ菰

古
志
草

古
寧
招

祐之

樂山

聖
卷
像

文志

木
箱

香芸

布衣

、
蒼
岱

梅柳

青^{カミ}茨

かねての朝日うつろふ柳うれ 春久雄
 静さの阿まうし伸の柳 う春 平市橋
 枝うりも折らさうあめさおれ 二幸晴河
 うろく出さるゝ何事んもさ柳は 三ウ 江
 来さうさう日の和うろく梅やあき 上毛 常晴
 水きうろくむせ川やうめあき 上毛 兼外
 鼻の素を通さねうろく葉毛有二月葉をひく
 柳うろく葉の素もあき 上毛のしし 源、席
 品をねは清し 風味や春春 水意

鶯

・白くち・重なる・種うろく・歌うみち
 ・黄鶯・黄鶯

鶯やも葉の末うろくの落月ね 古 大草
 春柳へしうろく黄鶯のしらせうり イセ 矢山
 黄鶯や春うろくうろく柳のうろく 上毛 春山
 うろくしうろくやうろく遠々うろく庭つき 弁山
 鶯の初うろくうろくさうろくうろく 一 里玉
 年うろくしうろく日や鶯のうろくうろく 下毛 子春
 うろくしうろくやうろく熊のうろくうろく 上毛 沖風
 黄鶯のうろくうろくうろく雨留うろく 了知

水 温

花咲く木はさるれも山はぬ

金 俄 友

水陰の石はあちくぬくこれ

帰 風

朝のふりそ氷をくくはぬむ

一 鴉

長 閑

長閑さや鳴ぬ鳥のこゑも花

下 十 條

寐をくらや宵の光をるの春

庭 犬

何となくあるや夜あけの月影

彼 静

暖 麗

風は池水のうき葉の如

古 未 葉

うららかなやんのお花樹をあり

水 壺

河 返

神鳴やせむ雪の河のうき

古 去 来

日のうちやあらき雪の河返

古 柳 月

都市雨はよりそえくはあ

未 精

青戸畑や枝はちけは雪のうき

甘 茶

凍 返 餘 寒

雪の戸は古城の雪の余寒

甘 志

挿く雪は付てのうき余寒

片 夕

枝は雪をき小庭の余寒

瓢 富

春もよき雪は街の雪をき

雪 風

申す雪はよき雪をき

雪 子

雪のうき雪をき

古 林 六

春 寒

松の花

・神・・・・・
・十・・・・・

ねのそちやふ袖の薄さなり

廿

遅流

さうよる雪のうらやまのつ花

三六

昇左

若松

あねやあつめうらやまのつ花

三六

氷壺

春鶯囀

・梅うさうたふ・子日衣・梅の香衣・雪衣・雪衣

葩煎

・名仲郎・詩集・云・花煎を・金中・は・花煎を・雪衣・

ハ白果を
用ひたり

口よけふ葩煎のうらやまのつ花

氷壺

山掛の皮

辛皮

百千鳥

・名仲郎・詩集・云・花煎を・金中・は・花煎を・雪衣・

・名仲郎・詩集・云・花煎を・金中・は・花煎を・雪衣・

・春の宮・霞の洞・

初霞

初霞のうらやまのつ花

氷壺

霞

霞のうらやまのつ花

霞

霞のうらやまのつ花

霞のうらやまのつ花

霞のうらやまのつ花

さくらんぼの蜜

斜倚

雨あきむし 雲く晴るる

3

鎌倉の多由伸一は震武館

附錄

白魚巾

情
長

子江之學，魚之爲物，出於江海，

卷之五

土

3

卷之四

卷之三

卷之四

2

卷之四

1

白魚

春の鳥

歩く魚の如くをりや雨の如く

公 朱

夢窓日永亭の巻

雙鳥

影やまゝのる

心
足

麻呂のふたつをくわへてふたつをくわへてふたつをくわへて

五
三

新編海國圖志

抱
憂

山下生石上

時
山
村

3 8
A
A
A
A
A
A
A
K

24

卷之三

一

卷之四

...

卷四

春風

遅き日

暮遅き日 四ツ谷より 舟子 辰

上井 由儀

春雨

所入の雨 能くつれ 雲あそ

吳城

海川のあり 雨さけ 雲の雨

新久雄

春風

とく 一 なる 庭の 籠や 春の 風

上元 心星

想ふ 春風を けあそ 春の 風

西馬

春の 麦の 春を けあそ 春の 風

金田 久

春の 麦の 春を けあそ 春の 風

、 貞史

春光

春光 春の 光

漁藤

春の水

春の水 春の 水

尋美

春の水 春の 水

清水

春の水 春の 水

智秋

海苔

海苔の 春の 水

飛騎

海苔の 春の 水

雨村

海苔の 春の 水

上元 木月

海雲

海雲の 春の 水

樹石

蜆

蜆の 春の 水

上元 湖立

東福寺懺法

恵日山薬師寺依り東南より初午の日方よりいへ明兆
より雲の裡に孝子三幅の像を掲げ懺悔を修む

水間寺初午詣

和泉の國より本号正親善法日新をもちよりの六十四
二歳の辰雅を遁走し秘毒をばさるるもあらず

摩耶參

佛母摩耶の切刺天皇寺振出鬼系神如系村の山より河を經
牛の足を踏むと人羣をふるまひて近きの人をくらひて

各難を承りて馬を引て去らせしや市に昆布を焼く所
本堂の正堂の十一面觀世音あり

馬部 一 广邪系

冰壺

身のふき馬の嘶声 戸殿の

芳

獻生子

をり中一二月数日はまき袋より穀類、李の葉種を入
ておくを以て

釋奠

水ヲテテモノヲ採集

分賞

先生の任居子持

俚語

事納

梅の香に何れも一重のうす

斗

馬紹厚少子也年事純如

漢物

本妙奇參

初年の日・春日祭
上の中御・日近・中御
使も五・内侍・中御・車

上卿并下台日
字小公云

大原野祭
上の印日たゝまき日あつゝ同
くゝ名あきふあひの神なり

祈年祭

四月よりあひの草よりむく春神宮より三千百三十三粒の御を
おふとあふ草よりむく春神宮より三千百三十三粒の御を

祇園八講 八日あり

列見

十一日公卿等小納言外記史等と相見花をうけててなほ花
より新望て公卿等あり六位以下の藝妓等とてをえりしむ

或船兵數の二省よりをきめて事を止むめよとて器量容大
を了るゆゑ明見といふとて

列是やきふの花も白きそ

拙
謀

利是也時多事

翠雲

吉野餅配

又解 前にも云ふ二月朔日蘇王權現へ傳へたる鏡を以て破
碎して多くの事より一へ炊て又解と云ふ一日常生

ふかひつり時、人々もあつた。又吉神、山中の
僧侶より、神もさういふ事あり。いふ事あり。

東のふりきり 帝ふくまの餅 破り

雙岳

餅 中々や 皆山坂より来る人

龍尾玉

薪，能

能
滑芝能くも六南都興福寺より七日より十三日迄あり七日の間
雨降せし十四日候時より上院の薪の余を毎火より取り水
屋の内にて猿杓を施す内迄又薪の終つて金春親世實生より四
中の業を度へ来武より南都休暇の事生勸り

二日目の終は黄より簡より

下
思
聲

二月堂の行ひ

南部より水を汲む所の事を尋る
なり一日より十日迄あり

遺教經

佛涅槃入玉^うん^んとく^くを悦ぶる由世に何れ九日
より十五日迄北地教位登りて法華を訓たり一教迹の名号

手増ふあり徒子本の
親近を佛よりしる是之

佛の別

二月のふせ・まき・佛・神・人・縁
・神・人・まき・神・人・縁

涅槃

山寺中修禪者

古
樗
良

涅槃音一量力靜一田一

孝
史
記

西行忌

手玉の輩あらん西行忌

天
隆
風

有るに
いふに
病むに
病むに

金
生
月

嵯峨挂炬サガタイマツ

十五日
興福寺常樂會
〔拓〕十五日

招
十五目

積塔

二月十六日る法華のあり〔題〕育人各信衆庵に集りて光孝天皇の皇子雨夜の御子積塔會を催す〔附〕南世鑑すけふ又都鄙遠近の信者はまゝ信て官位をまゝむあは授受勾あをりよ及それ已下よある追官はまゝむの信者群をまぜり

石塔や形国多あり衣襟り

芳州

石塔會豆腐の名述語りけり

下井

有隣

春分節

社日

此日より入るる

〔附〕まき二月の中なり豆夜郎ときお時正なるいふなり

春分のお後は過ぎばの日也或は春の後即ち戌日におきそつちりよ五あくの神をまつる日あり〔書〕又つり乙を

るるも寺の寺入りて社日くれ

あ満

細糸の定り昭々しく社日る事

上井

由儀

臘月

年終のおくを家ゆ社日くれ

渭水

あ合よ新風名なる社日る事

ハウ

一室

降中り國土をあらは社日くれ

たのめ

おのう夜も霜なりやあふ月

金

子そと

めりりあきと空のまきりや月繼

あ以

多るるも門川を社日繼

良あ

あをのよゆをいありぬあふ月

左白

治聲酒

〔海〕社日の酒をのめ耳の音をきき

治聲酒や群宜も強も品なり

金

不由

重花調

市望

圖
針

五月

子壽

提社の神、舊水を食せざる、社自ら必雨を降り量な
社爲の雨を降るあり、禹社の神、八辰を以て結成するあり

其工成の子あり、水土をすゝきつゝ、たふし社なり。世り木を柱て
仕まゝせり。夏より松殿より柘周の代より栗と傳法あり。王者土を
の土を封々社々候を
建より
増

樓
養

下
米
部

樂居

十九日（五）
延又五年（五）

伏二日聖徳太子の師忌日と云々天王寺にては少
所へは日俗人の葬所へ

大五日天照天神の御名曰乎大吉祥渡日八幡
 あり菅原氏の人行ふ云云 公

或之月中、家より大梁、
おめあひあふ

歸
風

生

二月八月を慶河の八月を渡り興代と云は興代若江戸より八月
二月二月を期し會つゝ寛文八年御多むて三月昔を期し

歸

雁

鳥

交

中 瞻

外 瞻

完 瞻

草 瞻

山 瞻

旁 瞻

草 瞻

草 瞻

北中一也

引

鴨

引

鶴

雁 引

鴨 引

鴨 引

鴨 引

鴨 引

鴨 引

鴨 引

鴨 引

鴨 引

林 史

月 瞻

植 瞻

田 久

月 瞻

泉 瞻

清 瞻

幽 瞻

在 瞻

雲雀

引鶴や春うのそをうけうて 春レ文里
 初き雀やねて種をぬき麦の中 賢外
 鶴のゆく里やうしるゝ遠き山 下毛弘瀬
 此くまうゝ急あき鶴のゆゆい 風什
 ひさしうゝそもさむかは城の鶴 春柳
 吹くや草の鶴の引もせ 畦風
 ねて引鶴をさふも叫る鶴 下井壺長
 引鶴やをうけうの空群 貞忠
 千細のゆいゆい 北帆道 や時雪う

鶯

琴 ひき

鶯を連たりちうや柳雪雀 似友
 雪のゆき山をうけぬ 香芸
 柳中へ跨るぬ川や雪雪雀 如永
 此邊ちうゝ町のうき 上井壺 柳 飛
 鶯あや山を屏風のまけ 新幹
 うき柳や海山のまき 煙風
 鶯あや名跡 新南 おきふ雪晴 花外
 おきふ雪晴 花外
 おきふ雪晴 花外
 おきふ雪晴 花外

駒鳥

顔鳥

のねよる(八) 顔鳥と申すは雄子よる山鳥なり顔面より
せよ鳥うき鳥といふやう(園) 園をよ花うつとてき
花ありこのやうに
あそびおれ

果鳥ハコトリ

顔鳥の鳥やまをくく暇のおうふ
果鳥も書く鳥をくまをく一物うて
何れも定めくまをく(一) 果

松毛鳥マツムシ

深山よまをく鳥やまをく
(園) 京師小鳥様とて尋ふは遠よりと云菊はくまの鳥
の小鳥ありまをく安くくく鳥はまをくくくく

雀の子

親の鳥をく松をくやまをく
甜をくふんくくく雀の子
下
玉
碩

孕鹿

在るは阿そをくやまをくくく
孕る鹿の神よまをくく雀の子
蓬歯む鹿のつまをくく孕る鹿
まの鳥えくくくくく孕る鹿
風をくくくくくくく孕る鹿
城をくくくくくくく孕る鹿
くくくくくくくくく孕る鹿
床をくくくくくくく孕る鹿
山
五
風

落之角
蜂巢

もらふ花鳥のしらさゝくもえり
 風よそへ春をおくまのやな草
 はちる春もいづ供やとらふ花
 影さしやにわたりて了る草
 菊もよそへ月波へ帰るあり
 葉はつらみ陰やいのちをきかす
 蜂の巣やきうまをうけて人
 葉をとりけり了る雨の降
 まる針もつやせう降のをま

命
真高
、花調
、雪蘇
出
久栄
ムサシ
逸閑
下リ
玉碩
、東有
命
山
命
素心

蛙

地虫出

蛙の鳴き声は、春の訪れを告げる。池や田んぼでよく見られる。雄蛙は大きな声で鳴き、雌蛙は小さな声で鳴く。雨の日は特に多く鳴く。蛙は肉食性で、昆虫や小魚などを食べる。また、蛙は皮膚が滑らかで、色も美しい。中には毒を持つ種類もある。蛙は日本の文化でも重要な存在で、多くの民謡や絵巻に描かれている。

蛙の鳴き声は、春の訪れを告げる。池や田んぼでよく見られる。雄蛙は大きな声で鳴き、雌蛙は小さな声で鳴く。雨の日は特に多く鳴く。蛙は肉食性で、昆虫や小魚などを食べる。また、蛙は皮膚が滑らかで、色も美しい。中には毒を持つ種類もある。蛙は日本の文化でも重要な存在で、多くの民謡や絵巻に描かれている。

蜥

蜥

蜥

蜥は、爬虫類の一種で、蛇やトカゲと近縁な動物である。体は細長く、四肢が短く、尾が長い。皮膚は乾燥しており、鱗で覆われている。多くの種類が日光浴を好み、暖かい場所を好む。また、多くの種類が肉食性で、昆虫や小動物を食べる。蜥は日本の文化でも重要な存在で、多くの民謡や絵巻に描かれている。

蜥は、爬虫類の一種で、蛇やトカゲと近縁な動物である。体は細長く、四肢が短く、尾が長い。皮膚は乾燥しており、鱗で覆われている。多くの種類が日光浴を好み、暖かい場所を好む。また、多くの種類が肉食性で、昆虫や小動物を食べる。蜥は日本の文化でも重要な存在で、多くの民謡や絵巻に描かれている。

うのそ猫鈴とひひのそまがし
人の眼をまのふくまのそ猫の魚
之交

諸子魚^{モロ}

湖水の小魚なり長二三寸を限りてを鱗より光り何れそ
き魚なり其性何れそ多し湖水僅品の肉之は西坂本より
由名より名とま

水より一ふく目を浮くや諸子魚

仙月

そ伸の糸のやうなものをくま

金

鮎子取^{ニレ}

・散の子と名をうたふきさ尺をうし鱗より光り何れそ
下品なり其子他の魚より勝つて大粒なり其性何れそ多し
散の子と名をうたふきさ尺をうし鱗より光り何れそ
散子を獲るも

成りしや網や鮎子とえぬを

山左

煙^{マテ}

家より出た煙をくまゆり鮎子と
馬刀より出た二三寸の煙のめくある貝より又作煙と
煙見より出た煙をくまゆり

升左

寄居虫^{ニナ}

何れしや網や鮎子とえぬを
波より出た煙や寄居虫の煙と
何れしや網や鮎子とえぬを

桐左

何れしや網や鮎子とえぬを
何れしや網や鮎子とえぬを

川左

何れしや網や鮎子とえぬを
何れしや網や鮎子とえぬを

不二丸

田螺

うき何れしや網や鮎子とえぬを

茶山

貝寄七の風

月三日月廿日お後難波の浦出な吹風を云あり此件津記
に依て風を寄る貝を拾ひ天王寺聖真會供養の花
をうへて其上をたすの事
歎かす

吟うとてやうとてやうとて田中うれ

松眠

貝うせの風やうせの風へうううう風

甘茶

貝うせの風やうせの風へうううう風

永介

浦波や貝吹うせの風のうせ

巴宣

貝うせの風やうせの風へうううう風

恒我

貝うせの風やうせの風へうううう風

其例

貝うせの風やうせの風へうううう風

土雲

貝うせの風やうせの風へうううう風

赤岳

貝うせの風やうせの風へうううう風

米有

貝うせの風やうせの風へうううう風

柏家

貝うせの風やうせの風へうううう風

月昇

貝うせの風やうせの風へうううう風

葉居

初雷

・初雷は圓形電光の
まの候なり

初雷や雨より風の陣あり

玉清

初雷やうせの風へうううう風

杉隣

うせの風やうせの風へうううう風

帰風

雨の降るや初雷を木のこゝろき
初雷や雲あふ——のこをふり
初雷のいづれや木葉ふ人通る
いづれ雷やうぐい地をうほぬる
初雷やるるを——を備ふ雲
初雷や雲もあふ——雲の色
はつて雷やは二三日木叶時候
春のまをち初雷のさすのち
細うちの半夜を——め了寝るを

春 桑居
余 洒我
イ 野竹
イ 其致
ヒ 素月
子 史記
ル 龍友
下 龍友
春 春

八重の梅

紅梅

接骨木
の巻

あけやうはさうさうめつ 寝る
お梅・秋中梅・庭端梅・さくら梅
お梅の雨よりあけやう 小庭うら
紅梅や春の夜にさくら むね
お梅やうらさうさう 雨よりさ
紅梅のさうさう 朝の雨より
さくらやあけやうめつ 庭さうさ
梅のさうさう 雨よりさ
さくらやあけやうめつ 庭さうさ
梅のさうさう 雨よりさ

何〜造るありし神ありあつて

山子

いふ代経人様〜世よりのや

はる根は底〜ありしつゝき

咲き〜しめしつゝのつゝ様う

露の芽とあつてつゝや落様

恒様〜は落き〜つゝき

接穂〜と序〜つゝ庭

去もあ〜苗代蔓〜つゝる

山寺や苗代蔓も庭のつゝ

美〜や苗代蔓蔓〜つゝ

咲〜つゝ〜つゝ〜

夕風〜む〜つゝ〜

山焼や庭のつゝ〜

末黒芒

伴〜のら末黒芒〜

何〜つゝ末黒芒〜

新〜つゝ〜末黒芒〜

新〜つゝ〜末黒芒〜

接木
接穂
苗代
柴黄

銀杏巷
焼野

山を焼
末黒芒

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

山子

畑 打

畦場や芒の介も皆さくら

花 海

畑打や家あふるさくら

古 妻 村

余あふる畑うり寺の男うり

子 妻

畑 焼

・さくらをさくら
・さくらをさくら

畑うり寺あふるさくら

古 妻 村

田 打

・田をさくら・田打

あふるさくら日追うる田面うり

古 妻 村

苗 代

さくらさくら影あふる苗代田

古 妻 村

苗代や水もさくらさくら

古 妻 村

水口祭

苗代よ水もさくらさくら
水もさくらさくら

古 妻 村

水口祭

建つさくら水もさくらさくら

古 妻 村

水口祭

建つさくら水もさくらさくら

古 妻 村

身は入る水もさくらさくら

古 妻 村

家あふる水もさくらさくら

古 妻 村

水口のさくらさくら

古 妻 村

種 井

さくらさくらさくらさくら

古 妻 村

さくらさくらさくらさくら

古 妻 村

種

四五割の家令と申す種井ハ
銘々といふもあつぬ種井ハ
土揚の家内出物と種井ハ
後中ハ初月と申す種井ハ
任中ハ家内りしと種井ハ
種池ハ初月と申す種井ハ
初月ハ初月と申す種井ハ
水の思ひと種井ハ
目もいふと種井ハ

五雲

一笑

上由儀

サ梅左

俄友

巨月

閑富

種池

種浸

水田

水田ハ初月と申す種井ハ
水の思ひと種井ハ
目もいふと種井ハ

山

山ハ初月と申す種井ハ
山ハ初月と申す種井ハ
山ハ初月と申す種井ハ

花調

完臨

花海

花酒

花月

花風

花女

麻蔴

麻蔴ハ初月と申す種井ハ
麻蔴ハ初月と申す種井ハ
麻蔴ハ初月と申す種井ハ

花調

完臨

花海

花酒

花月

花風

花女

獨活

獨活ハ初月と申す種井ハ
獨活ハ初月と申す種井ハ
獨活ハ初月と申す種井ハ

花調

完臨

花海

花酒

花月

花風

花女

防風

防風ハ初月と申す種井ハ
防風ハ初月と申す種井ハ
防風ハ初月と申す種井ハ

花調

完臨

花海

花酒

花月

花風

花女

種井

四五割の割合と申す種井は トサ 玉碩
銘々といふところある種井は ハ 米石

土揚の家内出揃ふ種井は ハ 五雲

種井は ハ 月主と種井は トサ 一笑

種井は ハ 家のりしる種井は トサ 由儀

種井は ハ 家のりしる種井は トサ 梅左

種井は ハ 家のりしる種井は トサ 俄友

種井は ハ 家のりしる種井は トサ 巨月

種井は ハ 家のりしる種井は トサ 閑富

種池

種浸

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 魯水

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 花調

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 完臨

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 花海

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 酒我

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 彼月

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 霜

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 峰女

種人 ハ 家のりしる種人 トサ 風

麻蒔

麻蒔

麻蒔

麻蒔

麻蒔

山葵

山葵

山葵

山葵

山葵

山葵

山葵

山葵

獨活

獨活

獨活

獨活

獨活

獨活 ハ 家のりしる獨活 トサ 峰女

獨活 ハ 家のりしる獨活 トサ 風

枸杞

馬鬣より寝しは枸杞を搗せ虎

上由儀

苦いよふくき搗や垣の枸杞

下玉碩

枸杞垣や蒼きくしゆる垣のよへ

米有

枸杞のよきよきしゆるしきき

方象

枸杞搗や垣根つきをくしひの

貞忠

之由搗や毒ハるもくきくき

葉居

枸杞のむや朝日の白く垣はき

森史

山葵ありきとる工まき山葵のれ

如白

山葵 杉菜

おあきりの細き根のき杉菜

前枝子

杉菜の伸る枝の杉菜の

葉居

杉菜の枝葉の伸る枝の

葉居

伸る枝の枝の伸る枝の

葉居

伸る枝の枝の伸る枝の

葉居

草芳

目くる枝の芳しき草の

専志

芳しき草の芳しき草の

葉居

四方の枝の芳しき草の

葉居

為羊

草の若葉

葉居

草の若葉

草の若葉

葉居

古棠

契史

優

● 常々
● 万の

山子

201. 200

十條

一

算子

月昇

菊

八九雜

文里

一
吳

除名

里
泉

雙葉ふるふと山をふり諸國あそびをうたて深井、ふとて
 丹波遠州豫州より多く歩みあそび甘南也。白き春日のあそび

のちろゝ夜半のふれこむれうまうまを是劇家めいじう禁をそへて
懐くも、おあつた文筆さうのきりてふめいしを

水邊や仲の昭々く芳の角 イナ 古棠

古棠

角光ハ泥芝ハ芝草の毛ハ葵丈

夢舟よりせむきぬ芦の角
下五
 優こ

優

土
筆

● 幸つて
● つちのそ

破_レ也_ハ 雲々_ニ 石_ノ 山子

菊苗・菊分る・菊植替る

竹等のらまゝに付く葉の苗 十條

根をうへるに近うくなきぬき苗

花もつゝ紅極みやきの苗
等子

伸てうけふもや葉の苗 早子 月昇

上

月昇

雨を以て葦葉の根分る
上
菊分

上
卷

菊

くさく日や夢の根方の土を穿んムサシ八九ノ雅

ムサシ

八九雜

世に人よせざる筆の根分れ、文里

蒲公英
穀子やゝめを
生ゝも深く
古
一
奥

菰
・
・
浮
ち
ち

常不置筆を擡げりて其の
公也
里
永

若紫

〔箋〕紫乃ハミナト山ニあり諸國ニ散ルニ志ス豫州ニ志ス
興州遠州豫州より多く歩み散ルニ甘南也〔古〕春日時ノ紫素

のまゝ衣志のふれとてうまゝ志を是則案のじう禁ををへて
はよりゝ衣志のふれとてうまゝ志ををへて

信濃路やむむらさきも雪の中 下毛 葉吹

時より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 優

山より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 懐父

雪より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 機

雪より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 下サ 方象

雪より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 下毛 優

雪より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 合

雪より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき ハッ 智幽

雪より雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 合 不九

蓬摘

韭

野蒜

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 如水

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 風

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 優

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 龍成

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 表

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 瑞英子

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 下 葉吹

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 上毛 牧

青子青子を雪のぬきの雪の衣をぬきぬき 下毛 果

胡葱

草摘

大根花

大根花 下毛 果

蔓草

蔓草之類其根蔓延於地
 其葉如心形或卵形
 其花小而多
 其果如小豆
 其根如絲
 其葉如心形
 其花小而多
 其果如小豆
 其根如絲

鳳中
 春
 春日
 春夜

春夜之月
 春日之風
 春夜之月
 春日之風
 春夜之月
 春日之風
 春夜之月
 春日之風

桃花の節

曲あめのはしやあめのも毎しう紫
二日。桃の節。白酒・蓮をち。桃勢今目桃花を海よりし
と病を除き思ふをよきとあり 困

三子うせを授けや代々又桃の酒 貞代世

せよ角よきもの授けやを能く酒 菊紫子

目もあめくくもふ 桃のさけ 子二 梨又

花すてもさむて出さう 桃の酒 下サ 三 市

たふく 能人もきふくを能く酒 方 赤

ふきあふくも能く酒の何う 桃の酒 貞 忠

ほのつきに授けきくをのさめ 花 酒

白酒

はまきくく白酒出さや飯の何 上サ 由儀

白酒や二階くも子のくく 桃 頑

草餅

半昔周り出王様乱群臣怒ひ若くぬ曲水の宴は或人子

をちを曲王よきとせくを王の味をめて家廟よきとせ

十はあり

黄きものめを深つらん 竹の餅 古 嵐 雪

子をちや衣紋をくく 若きとせ 尾 桜 左

あめはうてをの味をくく 竹の餅 子 貞 忠

竹をちの供は遠くぬむさね世 塩 美 子

信保のめ手供ふきや子の餅 上サ 風 成

青きぞ踏

唐の俗上巳と士女遊戯するを云ふなり又三月三日上巳踏歌
遊戯するを云ふ節より阿阿圖圖より人日人日は蜀人遊戯の事云

駕ありて素衣をふくむ二之冊

上
住
倚

唯を以てふききとつたふ

ヒクキ
何

御燈を北斗に奉る

増三日月ハ北山灵岸寺ありのまき岸より金
とて北辰は候せしむるなりや今辰辰は

北向の山をみて之を佛おろし
て（公）と云ふなり

藥師寺寂勝會

七日寺天武天皇の御影とてや毎年七ヶ目宮に
 己經を省たり此者もとあり

石清水臨時祭

惜中十日南祭あせちるゝ先中辰日減ち有弊人
 ちのちて休技をうきりしは仁孝殿のを

しるす所ありて、唐桂伯の臣に請ふを以て異邦人の對は
あつたものと云や、南朝も大匠以下こそ一の心を以て異邦人の對は
さう三缺の上缺のうちこそいふべき事、のちよりまゝと云ふの不
門の札のとき八箇をよけらせり、ふくむ新舊の報賽のしめし

新しきものなり
すゝしきものなり

〔公〕花よりめの糸よりむきあへん事の危しきなり疫神
を成し人々をまやかしを誑んとめ林檎實よりなり

Feb 1

民を接神を崇めて是しとめ

祐之

繪踏

西國より毎年二三月のちる切支丹邪宗の者を預めんと
めは強像をふちのせりるなりあり

やうきも、そのうちあき、弦端へ

の
仙

寒食

〔増〕をゆかり百五日清明の節のち二日をいふなり或百四日
或百六日といふなり其のち唐土より分る推して賢人史よりやと

うせー目とて三日の猶火を攻めたり。親試幸北方の寒國より友の
つりよりき老六陸羅の^{とく}んとして空倉をはなせし。周幸井おの刺史
と成り、財宝を棄て人を去て、民の希をせしめ、子推如きの
賢者の本意を知らしめ、井おの民を去りて温倉せしめたるは
あり。所を、移る後も空倉は八柱火を攻めたり。

古くは

小弓

the best the work, etc. that will.

you point a gun at me. That's not

an der Spitze des Berges

蘇杭之遊記

(Faint handwritten notes at the bottom of the page)

此後乃以爲之

開 元々此の日の出来事の歌の小説あり

3

۱۵۵

...

東の鐵の山

飢饉之餘、此等楊柳の葉を食して

[Faint handwritten notes at the bottom of the page]

(四) 華北政務委員會秘書長

自來水之飲用也

○又宣年中、宮女・宣令と書翰の儀

一、天之

1900

1875

Handwritten text: *Handwritten signature or name*

蹴鞠や、多しういふと云ふ女の子、東南
 あらあゝよ人のうらやむ遊びうれし
 うらうらに昔のふき敷の跡を危く、乙姫
 ゆらゆらやけりき敷もいまだ日なり、日、不危
 蹴鞠や、さかすからあはれそふあき
 あらあゝいふ多しのうらうら、さかす近、後球
 ならあゝや子の智恵あらきつゝあき常、イハ士気
 蹴鞠や、目をやうやう、さかす向う人伝、さかす来
 やうやうやあゝいふ多しのうらうら、女の子、下東弓

清明の節

初よりあり 皆唐土のくさくさく 書立あり あり
よ中一 ありあり (楷)

沙于

此即乃人八品居如沙平子紅
爲山

人々、鳥に養ふ一命にうたふ
山方

舟中入景幅心遠意平
上名
心
目

遠くゆく 女中 沙予、白燕

帝乃多此帝乃了也 下色 誠之

秋葉や多しうらふ女の子、東有
 うらふよ人のうらやむ遊むれ こゝろ 西我
 うらふに苦のふき歌の妹い危、乙姫
 うらふくやけき歌もさき日ごと日、不老
 秋葉やさかしくらきるきあき アキ 素店
 うらふくやけきいのこころき近、後求
 うらふくや子の智恵くらきつなき常 イハ士 忍
 秋葉や目をやうやうき向ふ人伝 ヒナ 帰来
 うらふくやわはほ地あき 下 東弓

清明の節

明の節 三河の節あり輪節の火を紹永堂へ寒食に燗火を焚
きしを後世の節は輪杵の火を取て節あり近所は
紹永堂あり皆唐土の事なり書主あり節
ありあり(増)

沙
于

上方飛鴻走石如沙千劫
古
去來

生即人八品居如沙干うれ
為山

人々ハ鳥ノ聲ノ一知ハ二知
山方

舟中の長閑なる遠き所なり
上名
心
星

遠くゆく 女中 中 女 中 沙 子 子 白 燕

希及于此帶了也 以平氣 下色 誠之

勸學會

十五日康保年中より大内記案保胤狂言侍供の罪をある事
さんして文を達達に達する徒をさしめて三月九月の十五日毎
行ひ給ふ事なり念極楽を言一夜山月西田と紀高名の作り
ありとも此會より勸學院に三本の北土生の西今の産の其供あり
最良氏の学生抱きありてありし
或は近世四葉大宮の西よりなり

梅若祭

武蔵國田川の東本母寺に
あり十五日

神ももて知あるを梅若祭なり

仙月

別せり又の連や梅若忌

村倉

近くても一日の事や梅若忌

合花酒

嵯峨大念佛

十五日狂言あり

千本念佛

被寺の事なり狂言
ありあり

入曆祭

十八日

浅草祭

十八日に江戸浅草家世々境内
三社の祭あり

御身拭

十九日嵯峨の難世の御腹より
御身をぬぐふ事あり

赤の毛より赤くぬぐふ御身拭

麦麩

さくむらのや御身拭

櫛

はも月も人ハ出候より御身ぬぐひ

下丹玉碩

近つきの形もさるや御身拭

子月鼻

ふおおと都へ出る御身ぬぐひ、子布

御影供

廿一日弘法大師入定の日を母寺に法よりけりて高座神
護寺仁和寺より女が法よりけり

御影竹や花よりぬぐひの事

氷蓋

高雄の女詣

三月廿一日新嘉徳修すゆふ女人の参る
御影仁和寺八寛平法皇の御影よりけり

ゆふの師事

思ふくするを然る多雄へありて

尾村

あふぬいのよき雄の白拍子

焚火

顔の目をいふらふ多雄のうれ

樹石

多雄の山と白をゆくまの那

水登

順の峯入

〔補〕毎年熊野より舊城大峰へ入るは出をたけ

峰よりふ本山方勢く聖徳院門よりあつて是を換換
せしむ。古きやうに大峰の後へ入るは出をたけの峰へと移る
山方勢く三聖院門よりあつて是を換換するは天を真言宗の
寺跡より移る

峰入や換換するは、橋のうへ、五

うの花をわくうきうき聖の峰、峰

峰入や夢は夢えていふの連、下サ

いふ入の峰よりうきやりの川、下サ

峰入やえあるをむのふうら、下サ

いふ入や夢は夢えていふの連、下サ

峰入やあきせぬふりもちう、下サ

いふいふと送りておぼる出立うれ、下サ

田鼠化て鶉と成

田鼠の鶉とあるうきの日和、下サ

暮の春

・夏を待・春の限り・春の名残・春のふり・春のふり
三月春・春のふり・春のふり

初春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
上心星
常盤のふり・春のふり・春のふり・春のふり
シラ母月

行春

白ひら・春のふり・春のふり・春のふり
古暮村
角春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
古小圃
行春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
古小圃
ゆき残を・春のふり・春のふり・春のふり
古小圃
り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
古小圃

夏近

り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
周友
り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
林月
り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
糸如街
ゆき残を・春のふり・春のふり・春のふり
上心星
り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
下心星
り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
下心星
行春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
下心星
ゆき残を・春のふり・春のふり・春のふり
下心星
り春のふり・春のふり・春のふり・春のふり
下心星
夏近のふり・春のふり・春のふり・春のふり
下心星

春惜

夏ちうー 是の生家の冬、
魚の身もあつてゐる。夏ちうー
おむき六梅も葬り夏ちうー
二番葉の存子とてあら近
友ちうー 奥の古相油丸
夏ちうー 柳の遊ふ所の様
いそひふ糸の料理や夏隣
昇る月と建のあはれで喜ばむ
産物や妻をむくさへほめ
ハツ
古水竹 其仙 古棠 左 史記 契史

爐塞

心をくぐりて、玉名跡うき
 背のそとに牡丹をあらはせしむる
 妻をくみしは、つらきものなり
 舟中にも、いづれも小悪女をくみし
 咲きよきにても、是れこそ妻をくみ
 ぬくものなり。この世の情をわたり
 まじりて、風情ありき。山の花
 は、あまたの百子——実者なき
 燈臺を、鉢の本数をもくみし危

ハ

心星　至願　佳風　由儀　家新　来支　閑高　一亭　智幽

鶉の巢

鶉の巢や木を裏日の照る

優

草の根岸ときけり鶉の巢

巢欣

青の叶さうきくをてえを鶉の巢

郭公の巢

巢のうちへ何れ鶉の郭公

鶉子

むきふ巢のまじく山を鶉

金 柳佳

雲入鳥

増 暮きふ朗詠の詞
多のうきふを鶉

鳥雲入る叶本のせり鶉

古 関更

鳥雲よ今日や山を鶉

鶉子

鳥雲よ今日や山を鶉

巨月

鳥 歸

鳥 歸 山 竹 友 晨 日 花 烟 里 窗 西 史 記 井

山 竹 友 晨 日 花 烟 里 窗 西 史 記 井

呼 子 鳥

呼 子 鳥 呼 子 鳥 呼 子 鳥 呼 子 鳥 呼 子 鳥

呼 子 鳥 呼 子 鳥 呼 子 鳥 呼 子 鳥 呼 子 鳥

ともあやの上れりと思ひまづつゝあり
 奥別あてとくき人ハ大葉を
 名取居らんバ世人の言ややゆづ
 〔歌〕
 ともあやのハむつやもはたきもの
 月照階の上よりハ葉のちとん
 りそりあはれとて一葉照心はあり
 とり更ふたこのちりよりけり
 古上り

麥
鴉

わづらひて懐ふありては
涙子為

古
其
角

未より竹葉の中へ子成哺する時ありアイフといふハ羽の
 時を云ふなり唯ハ翅り成しるを哺する時を云ふナキといふ之

春のあけ

古
寥
如

卷之八

榮雅子

わしのまゝに遊んでゐる

12
13

高ふりき中や夜明の妻

下
サ
三
郎

今もや久く懐へる〜夏まで

宋
武

櫻
鰈

[illegible]

柳
魚

龍光や梅臈を臺の

子

冰
香

其のち折の處は竹三寸餘なりて白く青淡玉々
畧すも色を帯る河原より

はくくと木の根をちや柳籠

左
相
左

水あまうし 湯や 井もへ

缺月

長江大業
柳鮓

傳
々

上うへのの築き

貞はふふに申の
のやう集なり

卷之五

優
々

櫻山

卷之五

古 卷 九

德水子校書

30.04

櫻 遲

Don't be afraid to ask for help.

人部

夢見草

藏 張の吳名・植安堂 此は文政の書見字・向來の書
 上は字の命と云ふ

仇名草

[illegible]

Handwritten signature: *John W. Smith*

卷之五

[illegible]

莫野干

曙草 （藏） はつち名義
 詳おまへ

花

・花のつぼみ。雪のふり。鐵道の花。三月と云ふやう。花は
・花見。雪見。都の雪。雪のふり。雪の空。都鳥。大都會。

・花の霜・ちりし・飛雪・露さ・雨の花
・雪の白・雪の黒・花雪煙

松樹山莊

右梅

11. 12. 1911

友 亞 同

Wiederholung des 1. Verses

手 龍 儀

There is a lot of work to do.

名案

2040 ✓ in Farmer's report

乙 良

$\frac{1}{2} \ln \frac{1}{2} + \frac{1}{2} \ln \frac{1}{2}$

下井十條

此乃一書之目錄也

刻 卷

1870-1871

卷之四

信をたす上は陣ふりその雨

古阜池

花をさし一敷のちをのちとす

古沙路

明ぬちを起る春のけり花をさす

古公平

苦散がしあき花のあふりぬ

古士教

そちをわが家のしけ庭のあり

古建出

あふのちをたしえをけりけりぬ

古者小

あふのちをたしえをけりけりぬ

古者玉

節をたすまゆのあき

世をたすまゆのあき

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

うのちをたしえをけりけりぬ

古者

木瓜の花

撞撥了連朝
古乙人

寺
親の
明の
子
や
雨
の
宮
十
條

濟之増も屋々々木以の爲
乙良

却と目よりきれぬ心や木石の心
靜く

三ノ下
サカキ

サカミ
様

令^レウ
法^フ

[illegible]

年のとうと、何うに當りて
食はるゝやうにあらうと

山人手抄中見之也
有
寒
松

山里子 旅子 河内 合 法 飯
日向 古 塘 田

沉下花

里の子孫指手を今迄久し
集欣

丁未年八月
 右
 三健人

きんぎょのふりしるし 米有

木蓮花

懐く中々、庵の字もや木蓮花
其劇

代餅子上下等 木蓮花、葉

本尊を
十條

卷之六 木華記

長春
長春市安寧路井の井柳

金

桜の花

楊梅の花

枣の花

藤

やまぐしと咲を林橘の車うりれ

さくらやいよけくあてて檻うり

楊梅の花をえり咲き咲くあり

葉の伸るよき咲るあり

咲かぬをえり一葉の紫のくさる

・るあき・るうん・るうら・ふちふ・るあぶ
・りる・るの丸・白ふち

木うりるを陽葉くさるるあり

葉あきき日よるくさるるあり

おのれに咲きくさるるあり

優

栗

左

如

米

祐

五

十

仙

香

古

梅

李

柳

柳

・るあき・るうん・るうら・ふちふ・るあぶ
・りる・るの丸・白ふち

さくらやいよけくあてて檻うり

逸

葎

菜の花

莖

さくらやいよけくあてて檻うり

楊梅の花をえり咲き咲くあり

葉の伸るよき咲るあり

咲かぬをえり一葉の紫のくさる

木うりるを陽葉くさるるあり

葉あきき日よるくさるるあり

おのれに咲きくさるるあり

・るあき・るうん・るうら・ふちふ・るあぶ
・りる・るの丸・白ふち

さくらやいよけくあてて檻うり

下
 西馬
 詠久
 雨具
 其
 分
 竟

下
分
賞

五ヶ

形^ハ十

我々もさうである
の一無きところ

よゝや青きぬのそとむもあはれむと
 佐々木藤子云又おんげけいふ花房まをうその
 ちをさかすはくしぬふをまはるのまきゆは錦を地
 ぞくく人形あて

端
古
之
時
乃
平
帝
人
計
州

陸
易

名はめく仙臺秋や百子布 藥

眉作りの花 一從鬼勸あり名人州是あり眉掃

薊 蹴さけて兄を居る土子の勸り水 イッ乙郎

余の叫ハ皆あきく鬼 薊 上素行

性遊むや薊の毛も明くもなる 峰 風

花んがきりし 鬼 薊 心 星

あけくもや薊の鬼はくも 由 良

鬼の名もきく 薊 出 油 新

薊の毛もきく 薊 新 明

櫻 草

花をわき成は葉後う唇紅白花もけり 薊も大まき 薊の毛も
九輪州七重州と云は此種ふあり

枯州の草は咲くも 優

咲くも 薊をあらへて 十 條

薊の毛もきく 薊 一 亭

薊の毛もきく 薊 玉 傳

薊の毛もきく 薊 尊 志

薊の毛もきく 薊 屋 交

薊の毛もきく 薊 契 史

枕をさるるんうらうら　さるるん　唯　風

疎うきよつふやうき　さるるん　又　草

恒ゆき　さるるん　庭や　梅子　子　雪　賦

虎杖 ^{イタドリ}
三月苗を生　茎叶の子結　上は赤き斑の星　九月実をむ　十月根を白く　根を白く

席は生　さるるん　を

席杖の影　さるるん　や　壁の井　葉　枝子

い　さるるん　や　喫　さるるん　牧の馬　葉　交

席杖の葉　さるるん　さるるん　荒地　れ

い　さるるん　の　さるるん　さるるん　葉　内　候　精　井

茗荷竹

い　さるるん　や　葉　さるるん　か　茂　の　表　葉　吹

席杖の馬　味　さるるん　秋　葉　色　優　く

葉　の　の　さるるん　さるるん　葉　茗荷竹　葉　葉　子

さ　さるるん　さるるん　さるるん　さるるん　花　海

葉　の　の　さるるん　さるるん　葉　茗荷竹　其　最

何　さるるん　さるるん　さるるん　葉　茗荷竹　若　友

葉　の　の　さるるん　さるるん　葉　茗荷竹　若　友

葉　の　の　さるるん　さるるん　葉　茗荷竹　若　友

葉　の　の　さるるん　さるるん　葉　茗荷竹　若　友

三月菜

三月大根

青麥

華鬘

鶴の歯むきと云ふや若菜中 上り由儀
 三月菜 東寺
 生魚よりき三月大根 真壽
 根伸のちと三月大根 砂来
 青麦の上と起えり 古菜古
 青麦や吹矢と云ふ里の原 相古
 白波をえと云ふ 麦の伸
 十條

お菊 やうやう
 起る信者村丹云

丁子草

弥生山

春の山

此の草のうゝ宿は是れ 美芳州 優々
茶 茶六所の草は此の中堅筋と云ふ白く花丁子草
 此の草を云ふ

佐草 せうそう 丁子草 巢欣

佐草 せうそう 丁子草 優々

自注 蜀白石はよりを云ふ山と
 せうそう

佐草 せうそう 丁子草 由儀

又此の草のハ重山人 古園更

佐草 せうそう 丁子草 升

春の鮒

にの 新の とき 空高く 舞の 山

五十四

清
水

水やまゝの
附

△

味友

春の色

陳子昂の詩集

尾村

朝うまにさるるも毒の毛

祐
之

叶
ゆきとくふくはるのち

酒
醉

多岐をゆく中の人を馬の毛

如白

一、（一） 日本、（二） 朝鮮、（三） 蒙古、（四） 印度、（五） 南洋、（六） 西伯利亞、（七） 阿拉斯加、（八） 加拿大、（九） 美國、（十） 英國、（十一） 法國、（十二） 德國、（十三） 奧國、（十四） 義大利、（十五） 西班牙、（十六） 葡萄牙、（十七） 希臘、（十八） 土耳其、（十九） 埃及、（二十） 利比亞、（二十一） 突尼斯、（二十二） 阿爾及利亞、（二十三） 摩洛哥、（二十四） 塞內加爾、（二十五） 幾內亞、（二十六） 獅子山、（二十七） 象牙海岸、（二十八） 多哥、（二十九） 貝寧、（三十） 尼日爾、（三十一） 乍得、（三十二） 中非、（三十三） 喀麥隆、（三十四） 加蓬、（三十五） 剛果、（三十六） 安哥拉、（三十七） 納米比亞、（三十八） 博茨瓦納、（三十九） 南非、（四十） 斯威士蘭、（四十一） 萊索托、（四十二） 毛里求斯、（四十三） 塞舌爾、（四十四） 馬達加斯加、（四十五） 留尼汪、（四十六） 法屬印度洋領土、（四十七） 法屬圭亞那、（四十八） 法屬馬提尼、（四十九） 法屬留尼汪、（五十） 法屬聖皮埃爾和密克隆、（五十一） 法屬瓦利斯和富圖納、（五十二） 法屬新喀里多尼亞、（五十三） 法屬波利尼西亞、（五十四） 法屬西印度群島、（五十五） 法屬南美洲、（五十六） 法屬中非、（五十七） 法屬西非、（五十八） 法屬北非、（五十九） 法屬東非、（六十） 法屬南太平洋、（六十一） 法屬南印度洋、（六十二） 法屬南大西洋、（六十三） 法屬南美洲、（六十四） 法屬中非、（六十五） 法屬西非、（六十六） 法屬北非、（六十七） 法屬東非、（六十八） 法屬南太平洋、（六十九） 法屬南印度洋、（七十） 法屬南大西洋、（七十一） 法屬南美洲、（七十二） 法屬中非、（七十三） 法屬西非、（七十四） 法屬北非、（七十五） 法屬東非、（七十六） 法屬南太平洋、（七十七） 法屬南印度洋、（七十八） 法屬南大西洋、（七十九） 法屬南美洲、（八十） 法屬中非、（八十一） 法屬西非、（八十二） 法屬北非、（八十三） 法屬東非、（八十四） 法屬南太平洋、（八十五） 法屬南印度洋、（八十六） 法屬南大西洋、（八十七） 法屬南美洲、（八十八） 法屬中非、（八十九） 法屬西非、（九十） 法屬北非、（九十一） 法屬東非、（九十二） 法屬南太平洋、（九十三） 法屬南印度洋、（九十四） 法屬南大西洋、（九十五） 法屬南美洲、（九十六） 法屬中非、（九十七） 法屬西非、（九十八） 法屬北非、（九十九） 法屬東非、（一百） 法屬南太平洋、（一百零一） 法屬南印度洋、（一百零二） 法屬南大西洋、（一百零三） 法屬南美洲、（一百零四） 法屬中非、（一百零五） 法屬西非、（一百零六） 法屬北非、（一百零七） 法屬東非、（一百零八） 法屬南太平洋、（一百零九） 法屬南印度洋、（一百一十） 法屬南大西洋、（一百一十一） 法屬南美洲、（一百一十二） 法屬中非、（一百一十三） 法屬西非、（一百一十四） 法屬北非、（一百一十五） 法屬東非、（一百一十六） 法屬南太平洋、（一百一十七） 法屬南印度洋、（一百一十八） 法屬南大西洋、（一百一十九） 法屬南美洲、（一百二十） 法屬中非、（一百二十一） 法屬西非、（一百二十二） 法屬北非、（一百二十三） 法屬東非、（一百二十四） 法屬南太平洋、（一百二十五） 法屬南印度洋、（一百二十六） 法屬南大西洋、（一百二十七） 法屬南美洲、（一百二十八） 法屬中非、（一百二十九） 法屬西非、（一百三十） 法屬北非、（一百三十一） 法屬東非、（一百三十二） 法屬南太平洋、（一百三十三） 法屬南印度洋、（一百三十四） 法屬南大西洋、（一百三十五） 法屬南美洲、（一百三十六） 法屬中非、（一百三十七） 法屬西非、（一百三十八） 法屬北非、（一百三十九） 法屬東非、（一百四十） 法屬南太平洋、（一百四十一） 法屬南印度洋、（一百四十二） 法屬南大西洋、（一百四十三） 法屬南美洲、（一百四十四） 法屬中非、（一百四十五） 法屬西非、（一百四十六） 法屬北非、（一百四十七） 法屬東非、（一百四十八） 法屬南太平洋、（一百四十九） 法屬南印度洋、（一百五十） 法屬南大西洋、（一百五十一） 法屬南美洲、（一百五十二） 法屬中非、（一百五十三） 法屬西非、（一百五十四） 法屬北非、（一百五十五） 法屬東非、（一百五十六） 法屬南太平洋、（一百五十七） 法屬南印度洋、（一百五十八） 法屬南大西洋、（一百五十九） 法屬南美洲、（一百六十） 法屬中非、（一百六十一） 法屬西非、（一百六十二） 法屬北非、（一百六十三） 法屬東非、（一百六十四） 法屬南太平洋、（一百六十五） 法屬南印度洋、（一百六十六） 法屬南大西洋、（一百六十七） 法屬南美洲、（一百六十八） 法屬中非、（一百六十九） 法屬西非、（一百七十） 法屬北非、（一百七十一） 法屬東非、（一百七十二） 法屬南太平洋、（一百七十三） 法屬南印度洋、（一百七十四） 法屬南大西洋、（一百七十五） 法屬南美洲、（一百七十六） 法屬中非、（一百七十七） 法屬西非、（一百七十八） 法屬北非、（一百七十九） 法屬東非、（一百八十） 法屬南太平洋、（一百八十一） 法屬南印度洋、（一百八十二） 法屬南大西洋、（一百八十三） 法屬南美洲、（一百八十四） 法屬中非、（一百八十五） 法屬西非、（一百八十六） 法屬北非、（一百八十七） 法屬東非、（一百八十八） 法屬南太平洋、（一百八十九） 法屬南印度洋、（一百九十） 法屬南大西洋、（一百九十一） 法屬南美洲、（一百九十二） 法屬中非、（一百九十三） 法屬西非、（一百九十四） 法屬北非、（一百九十五） 法屬東非、（一百九十六） 法屬南太平洋、（一百九十七） 法屬南印度洋、（一百九十八） 法屬南大西洋、（一百九十九） 法屬南美洲、（二百） 法屬中非、（二百零一） 法屬西非、（二百零二） 法屬北非、（二百零三） 法屬東非、（二百零四） 法屬南太平洋、（二百零五） 法屬南印度洋、（二百零六） 法屬南大西洋、（二百零七） 法屬南美洲、（二百零八） 法屬中非、（二百零九） 法屬西非、（二百一十） 法屬北非、（二百一十一） 法屬東非、（二百一十二） 法屬南太平洋、（二百一十三） 法屬南印度洋、（二百一十四） 法屬南大西洋、（二百一十五） 法屬南美洲、（二百一十六） 法屬中非、（二百一十七） 法屬西非、（二百一十八） 法屬北非、（二百一十九） 法屬東非、（二百二十） 法屬南太平洋、（二百二十一） 法屬南印度洋、（二百二十二） 法屬南大西洋、（二百二十三） 法屬南美洲、（二百二十四） 法屬中非、（二百二十五） 法屬西非、（二百二十六） 法屬北非、（二百二十七） 法屬東非、（二百二十八） 法屬南太平洋、（二百二十九） 法屬南印度洋、（二百三十） 法屬南大西洋、（二百三十一） 法屬南美洲、（二百三十二） 法屬中非、（二百三十三） 法屬西非、（二百三十四） 法屬北非、（二百三十五） 法屬東非、（二百三十六） 法屬南太平洋、（二百三十七） 法屬南印度洋、（二百三十八） 法屬南大西洋、（二百三十九） 法屬南美洲、（二百四十） 法屬中非、（二百四十一） 法屬西非、（二百四十二） 法屬北非、（二百四十三） 法屬東非、（二百四十四） 法屬南太平洋、（二百四十五） 法屬南印度洋、（二百四十六） 法屬南大西洋、（二百四十七） 法屬南美洲、（二百四十八） 法屬中非、（二百四十九） 法屬西非、（二百五十） 法屬北非、（二百五十一） 法屬東非、（二百五十二） 法屬南太平洋、（二百五十三） 法屬南印度洋、（二百五十四

2

本
也
不
可
不
知
也

W
E

人にもせし毎年のうらふや毒の心

冰
臺

春朗詠

寒山转苍翠

永年

山月や常々暮るる處にあり

狗
雪

春之小者比之校中筆性極佳

德
祥

此障也經曰日暮夕照

周
海

新々々々々

有巢

月半
樓上見
多如
雲

紀
亭

1

1

彦子の子の自註
小松山

五

梅の穴へはるる是より	舟の底	美交
十歩やゝ居るゝ返くしきう水	三光	美沙
黄くもくもくしきうあり日のぬく	吳由	
りきまゝ遠岬の濱の里梅く	方中	
は梅より位をり里山より那	叩月	
は梅より里より里より里より	心肅	
きりきりきりきりきりきり	岸山	
おきききききききききき	山方	

きのきききききききききき	岸山
ききききききききききき	山方
ききききききききききき	心肅
ききききききききききき	叩月
ききききききききききき	方中
ききききききききききき	吳由
ききききききききききき	三光
ききききききききききき	美沙
ききききききききききき	美交

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、

巨 揭
 左 眠
 夏 玉
 康 德
 依 板
 右 木
 好 甫
 左 木
 十 木

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、

野 里
 嘉 穀
 波 靜
 右 鳴
 家 子
 志 芳
 仁 木
 結 板
 左 郎

鐘くふきりあも雪消る如
 あつたに雲は雨や斜をゆる
 春よりや母のり何よこのさくら
 黄よりや旭のまゝなるまゝ
 門松や舟より上る花ふね
 若者の式もさうさう解、
 桜が枝を風いささして花月、
 のしろ目な歌を寄ふ物ゆめ、
 いづれさらさらと流れて思ひ出ぬ、
 仕山

[illegible]

仁は注連草とし古井をたぬむ 等乙名
中の人ハ訪ふと垣根は其の雪ハ 雪賦
黄々やわらうとふくぬ身ハ其の 夢詞
ねねしといふと一層種を授けり 子布
初雪やうきききききききききき 令
垣根やうき根をうきききききき 海賦
ふくきききききききききききき かに東葉
は降くききききききききききき 令
雪ハ雪のきききききききききき 金山

月あつちきききききききききき 拾遺
きききききききききききききき 蔵和
雪ハ雪のきききききききききき 龍成
枸杞のききききききききききき 令
雪ハ雪のきききききききききき 松丈
雪ハ雪のきききききききききき 榮堂
雪ハ雪のきききききききききき 梅集
雪ハ雪のきききききききききき 令
雪ハ雪のきききききききききき 令

[illegible]

麻生きのをせしむるや里のより
 枸杞の葉も中へやるのそとに
 砂浜よりせしむるや磯の境
 子をえの暇をやるの起のふき子
 遠路の草よりより一握のよふふ
 幼ねや一人に抱きつるふりち
 四方の空を渡る日を止し得月
 初雪よふあふ一はの隙をうめ
 中へやより目のをさすや春のは
 花の葉

月のみさき原よりさききふ山懐くあり
 田つちや。隈の雪やもとの川
 黄たふや風さの井さうしゆ。ね
 最尾の茶あつてうきめり
 空うへ。二のさきさうや。初聴い。家
 うくさのきつん。鳴やさん。降。一馬
 淡雪や。梅のさきさう。降。子。雄。飛
 雪お。さ。る。さ。さ。さ。さ。下。サ。星。梅
 人さうく。ふ。さ。さ。さ。さ。上。梅。室

